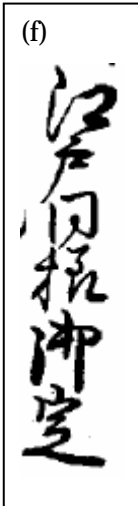


## 書き手の癖に慣れる

(f)の最初の江はしが「シ」で2は2という感じなので、「江」という字です。次は「戸」なので「江戸」。なお、「江」という字は、「江(へ)」というふうに多用されますので、ここで覚えてください。

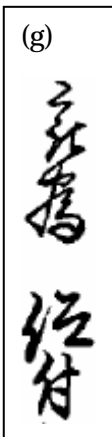


次の2文字が難関です。同は「門」の部分から「門(もんがまえ)」を読み取って「問」「問」などと読んでしまいそうです。確か

にこの字だけ見れば、そのように読めなくもないのですが、次の抗が、第14回で抗と出てきた「様」ですので、「同様」で「同様」と読めます。

と抗が同じ字だというのは違和感がありますが、いろいろな崩し方をするものです。今回の場合は、第14回と今回では違う文書を読んでいるので、書き手の崩し方のクセが違うということもあります。したがって、同じ書き手の文書をいくつか読んでいるうちに、クセに慣れてきて、読めなかった文字も読めるようになることもあります。ちなみに第5回

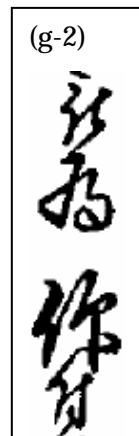
~11回で使っていた文書は氣(願)という字に少しクセがあったと思います。



さて、次の沖は、「御」。最後の定が「定」という字です。この字は頻出するので、覚えてしまった方がいいです。(f)をまとめると「江戸同様御定」となります。

(g)の被は「被」なのですが、被だけでも「被」と読めそうです。上に付いている為は何?となってしまうのですが、次回まで置いておきます。次の為は「為」という字で、言われてみるとそれほど崩されていない字だと思います。

(g-2)は第4回に出てきたものです。実は(g)と(g-2)は全く同じことが書いてあります。“よく出てくる言い回し”で「被為仰付(おおせつけなされ)」です。



(g)の抗の方がより崩してありますが、共通する何かを感じ取ることはできると思います。

